

1 中学校国語科

(1) 単元名

第1学年 「言葉のきまり」
「文の成分」をつかもう

(2) 単元設定の理由

中学校における文法学習は、言語による表現と理解の活動をより適切に充実させるための「言葉の規範」として、国語学習において重要な位置を占めている。

しかし、生徒の言語生活には、言葉の使い方の乱れや表現力の不足が顕著に見られ、「表現と理解の指導を通して真に生きてはたらく力として身に付く」文法学習の成果が十分に現れていない現状が考えられる。学習指導において「国語の特質を理解させるため、ある程度まとまった知識を得させるための指導もできる」という本来の主旨が生かしきれず、表現と理解に役立てるとする視点が薄れ、文法を独立した学習として展開する傾向がある。また、単に知識の習得として学習する授業にもなりやすく、「覚える」ことに力が注がれる学習状況にある。本来、文法学習は、表現と理解に役立てる最も基礎的な学習であるだけに、「なぜ」「どうして」という学習の基礎となる疑問や生徒自身が課題意識をもって、より主体的に学ぶ必要があると考える。

本単元では、主語・述語にねじれのある文で話したり、書いたり、あるいは修飾・被修飾の照応が理解できないなどの生徒の言語生活の実態を踏まえ、文法学習の入門期における「文の成分」について、それぞれのもつ働きや役割を文の中から考える学習を行い、認識や思考の根幹となる主語・述語などそれぞれの成分を正しくとらえられるようにしたい。こうした学習を通して、言葉の規則性や系統性を把握するとともに、文を正確に表現したり、正確に理解したりするという「表現と理解に役立たせるもの」にしていくことができると考える。そして、正しい日本語を身に付けるとともに、正しい日本語を使うことに対する意識を高め、表現力・理解力の向上につなげていきたい。同時に、規則性の気付きや発見、納得のできる学習過程を大切に、それを自分の実際の言語生活に生かす学習を通して、文法を学ぶことの意味や楽しさを実感させたい。また、こうした学習活動の中で、学ぶ意欲を高め、言葉への感受性を耕し、言葉を豊かにすることによって豊かな自己をはぐくむ基盤を形成したいと考える。

(3) 単元の目標

- ・ 日本語に関心をもち、課題を明らかにしながら、意欲的に学習することができる。
(国語への関心・意欲・態度)
- ・ 学習内容を確認めながら、正しい日本語を使って、作文の主題を表現することにつながる
ことができる。
(表現の能力)
- ・ 文の成分(主語・述語・修飾語・接続語・独立語)の役割や働き、成分同士の関係を理解
することができる。
(言語についての知識・理解・技能)

(4) 指導計画(全7時間)

次	時	学習過程	学習活動	指導上の留意点	評価の規準
第一 次	1	つかむ 展開1 (1/1)	・主語・述語・修飾語の復習を通して、それぞれの文の成分の働きや役割について理解し、今後の学習課題をもつ。	・コンピュータ等の機器を活用し、ワークシートやヒントカードを使い、自ら進んで取り組みそれぞれの文の成分の役割や働きを理解できるように支援する。 ・既習の文の成分に対して、課題意識をもたせ、学習意欲を喚起する。 ・コンピュータの特性を生かした指導を行うため、操作に対する適切な支援を行う。	・主語・述語・修飾語に対して自分の課題をもとうとする。(関) ・主語・述語・修飾語の役割や働きを理解することができる。(言)
	2	もどめる 展開2 (1/5)	・主語・述語の関係を正確につかむことで、主述のねじれない文を書く。	・コンピュータ等の機器を使い、生徒一人一人の課題に沿った支援をする。 ・主述のねじれを防ぐために、主語・述語の関係を正しく理解する必要があることを理解できるようにする。	・自分の課題に対して積極的に取り組もうとする。(関) ・主語・述語の関係を理解し、正しい使い方ができる。(言)
第二 次	3		・修飾語の種類や修飾・被修飾の関係を理解し正確な文を書く。	・修飾・被修飾の関係を理解することは、文の意味を正しく表現するために必要であることを理解できるようにする。 ・コンピュータ等の機器を使い、生徒一人一人の課題に沿った支援をする。	・自分の課題に対して積極的に取り組もうとする。(関) ・修飾語の種類や修飾・被修飾の関係を理解し、正しい文を書くことができる。(言)
	4		・接続語の種類や働き、独立語の特徴を理解する。	・ワークシートやヒントカードを使い、接続語の種類を理解させ、文と文との関係から正しく使えるように支援する。	・自分の課題に対して積極的に取り組もうとする。(関) ・接続語の種類や、働き、独立語の特徴を理解し、正しく文と文をつなげることができる。(言)
	5 6		・補助の関係、並列の関係や連文節について理解する。	・補助の関係や並列の関係について理解できるよう、基本的文例やヒントカードなどを活用する。	・自分の課題に対して積極的に取り組もうとする。(関) ・補助の関係、並列の関係、連文節を理解することができる。(言)
第三 次	7	深める	・文の成分の学習内容を生かし、作文を書く。	・作文の主題は自分で設定するように促す。 ・自分の課題に対して、学習の成果が分かるようにすべての内容を含めたものにするよう支援する。 ・自分の主題が明らかな文章になるように支援する。	・自分の課題に対して積極的に取り組もうとする。(関) ・自分の主題が、適切に表現することができる。(表) ・文の成分の種類や役割や働きの学習の成果を表わすことができる。(言)

※(関)…国語への関心・意欲・態度 (表)…表現の能力 (言)…言語についての知識・理解・技能

(5) 本単元の指導におけるコンピュータ活用の考え方

表現及び理解領域の学習では、授業改善に取り組めていても、言語事項の文法学習となると、どちらかという知識注入型の授業が展開され、「文法嫌い」の生徒をつくり出すことも少なくない。こうした生徒をなくすためにも学習指導要領の「事項の取扱いが必要以上に細部にわたったり形式的になったりしないように注意すること。」という取扱い事項をよく吟味し、学習意欲を喚起する必要がある。そこで、生徒の興味や学習の必要性に応じた学習の一方策としてコンピュータ活用による授業の工夫を考えた。現在、多くの生徒がコンピュータに興味を抱いていることは複数の調査から知ることができるが、学習効果をより上げるために、本単元でもより効果的な活用場面を設定したい。

この単元では、コンピュータを活用した学習を中学校における文法学習の入門期である「文の成分」の中で取り組み、その後の文法学習を意欲的に取り組むための要として位置付けることとした。「文の成分」については、小学校段階で既に獲得してきている知識や言語力から安易に考えたり、文法用語の煩雑さから敬遠したり、苦手意識を抱く生徒も少なくない。こうした傾向が見られる「文の成分」の学習の導入部分で、有効な手だてとするためには、生徒の言語実態から離れずに例文を考え、自ら取り組む意欲をもてるソフトウェアの工夫が必要となる。また、一人一人にあった課題設定ができること、ドリル的学習だけでなく、自ら考える道具としての活用場面があることなど多様な活用の在り方が考えられなくてはならない。

ア 課題解決学習の道具としての活用

学習意欲を高め、自己学習力を身に付けるため、現在、課題解決学習の必要性が高まっているが、授業改善が必要とされる文法学習の現状を考える時、一層その必要性は求められる。

小学校4年生及び6年生の京都府小学校基礎学力診断テスト等の報告では、単文における主語・述語の定着度に比べ、重文、複文の場合、「は」や「が」のついている語を形式的に

主語とみなしたり、主語のすぐ近くにある語を述語とみなすため定着度が低いという傾向が見られた。こうしたつまずきをなくし、「文法は覚える学習」といったわりきりや「文法を勉強してなんになるの」というなげやりの気持ちを克服するべく、自分自身でその規則性を発見し、論理的な思考を通し、納得という形で学習することが重要なのである。そのためには、生徒自身が課題意識をもって学習することが必要になっている。

この単元の実践では、課題の一つを、「文の成分」の規則性の把握とし、もう一つの課題を、生徒自身の言語生活における「文の成分」の乱れの発見と批正とし、学んだことの生活化を図ることとした。課題解決に当たっては、課題への意欲付けを大切にし、ここでは、文の成分の基礎である主語・述語は既習のものであるだけに、気付きや納得できる学習や課題解決の道具としてコンピュータを有効に活用する。この時、課題への興味・関心を高めるためだけでなく、自力解決のための一人学習の手引きをソフトウェアの中に位置付け、ヒント的に考えさせる手だてを用意することが必要である。また、常にコンピュータと個人という学習スタイルではなく、課題解決に際しては一人で考えたことを集団の中で練り合い、集団思考による交流の場をもつことが学習を高め合う場合に必要である。

イ 個に応じた学習活動の道具としての活用

文法学習は、その習熟においてドリル的な学習も必要である。習熟の度合いは一人一人違いがある。そこで多くの問題を提示し、学習者の回答を診断しながら問題の内容を変化させ、学習内容を定着させるという特質をもつコンピュータ学習が有効である。一斉授業の中で、基礎基本を確認した後、自分の習熟を確認しながらコースを選択し、自分の習熟に応じた学習を進めるとともに、つまずきがある場合の手だても自分で選択しながら、解決を図ることができる。

学習の達成度の自己認識をすることによって、自分の決めたコースで学習し、自己評価していくことによって自己学習力を生み出す基礎を形成することができる。また思春期における他との比較意識からくるコンプレックスも克服することができ有効である。

(6) 展開 1 の目標

- ・ 主語・述語・修飾語の役割や働きを理解するために、主体的に学習しようとする。
(国語への関心・意欲・態度)
- ・ 主語・述語・修飾語の役割や働きを理解することができる。
(言語についての知識・理解・技能)

展開 2 の目標

- ・ 主語・述語のねじれをとらえ、主体的に学習しようとする。
(国語への関心・意欲・態度)
- ・ 主語・述語のねじれをとらえ、正しい文につくりかえることができる。
(言語についての知識・理解・技能)

(7) 本時の展開(40ページ、41ページ参照)

展開1

過程	学習内容	学習活動		個に応じた指導の手立て		評価の観点
		学習形態	主な学習活動	指導上の留意点	機器、教材、教具等	
導入	・本時の学習の内容を知る。	一 斉	・本時の学習内容について知る。	・主語、述語、修飾語についてヒントカードを基に前時の学習内容を振り返られるようにする。	・短冊カード (ヒントカード) ・コンピュータ	
			既習の文の成分(主語、述語、修飾語)について、その文の中の役割や働きを整理してつづむ。			
	・文の基本となる語(主語、述語、修飾語)の必要性を確認する。	個 別	・主語、述語、修飾語を省いた文例(画面1)を基に、文として整わない理由を考える。 ・分からなければ、画面2(ヒント画面)を選択し、文を整えるために必要な適切な語を考える。 ヒントコース — 左のコースを選択し、取り組む。 ヒントなしコース —	・コンピュータ操作については初めに説明するとともに、机間指導も行う。 ・画面1を基に自力解決が図れるように、コースを選択するようにする。 ・適切な語を補いながら文として整わない理由を考えるように助言する。 ・適切な語は、各自の考えが反映されるように自由に考えるように指示する。	・文法ワークシート ・ヒントカード ・コンピュータ	・画面1の課題を考えるとき主体的に取り組もうとしているか。(関) ・適切な語を補うことができるか。(言) ・コンピュータを積極的に活用して考えるようにしているか。(関)
		グループ	・画面1・2より、個別に考えた理由をグループの中で話し合う。 ・画面1の文が整わない理由を全体で発表し、確かめ合う。	・文法ワークシートを基にしながら文として、大切な成分が欠けていることを確認するようにする。	・文法ワークシート	・主語・述語・修飾語が欠けているか。(言)
展開	・主語・述語・修飾語の役割について考える。	個 別	・画面2(ヒント画面)の文の適切な語の役割や働きを各自がコースを選択して考える。 ヒントコース — 左のコースを選択し、取り組む。 ヒントなしコース —	・自分で考え、自分の言葉で表現するように助言する。 ・主語、述語、修飾語の役割や働きを自分のものとして捉えるように助言を与える。 ・文の中で主語、述語、修飾語が重要な要素であることに気付くようにする。 ・すぐにヒントコースに進むのではなく、自力で考えるように指示する。	・文法ワークシート	・主語・述語・修飾語の役割や働きを理解できるか。(言)
		グループ	・画面1・2より、個別に考えた理由をグループの中で話し合う。 ・画面1の文が整わない理由を全体で発表し、確かめ合う。	・文法ワークシートを基にしながら文として、大切な成分が欠けていることを確認するようにする。	・文法ワークシート	・主語・述語・修飾語が欠けているか。(言)
		個 別	・画面2(ヒント画面)の文の適切な語の役割や働きを各自がコースを選択して考える。 ヒントコース — 左のコースを選択し、取り組む。 ヒントなしコース —	・自分で考え、自分の言葉で表現するように助言する。 ・主語、述語、修飾語の役割や働きを自分のものとして捉えるように助言を与える。 ・文の中で主語、述語、修飾語が重要な要素であることに気付くようにする。 ・すぐにヒントコースに進むのではなく、自力で考えるように指示する。	・文法ワークシート	・主語・述語・修飾語の役割や働きを理解できるか。(言)
		一 斉	・主語・述語・修飾語の役割や働きを、全体で発表し、確かめ合う。	・発表を通して主語、述語、修飾語の役割や働きを、自分のものとしてとらえるようにする。	・文法ワークシート	・主語・述語・修飾語の役割や働きを理解できるか。(言)
まとめ	・学習内容を整理し今後の学習課題をもつ。	一 斉	・今日の学習を振り返り、新しい学習課題を見つけ、ワークシートに記入する。 ・次時の学習内容を知る。	・主語・述語・修飾語・接続語・独立語を含む文を提示することによって、新しい課題を発見できるように助言する。	・文法ワークシート	・今日の課題を整理し、新しい課題を見つけようとしたか。(関)

※(関)…国語への関心・意欲・態度、(言)…言語についての知識・理解・技能

展開2

遠程	学習内容	学習活動		個に応じた指導の手立て		評価の観点
		学習形態	主な学習活動	指導上の留意点	機器、教材、教具等	
展 開	・本時の学習の内容を知る。	一斉	・本時の学習内容について知る。 主語・述語の関係を正しくつかみ、主語・述語のねじれない文を書く。	・主語、述語について短冊カードで確認するようにする。	・短冊カード (ヒントカード)	
	・例文1にある主語・述語のねじれを見つけ、正しい文につくりかえる。	個別	・文法支援ソフトの中の例文1を用いて個別に、主語・述語のねじれを見つける。 例文1(山田君からの手紙) こんにちは、海野君。海野君のマンガは、いつもおもしろく読んでいたよ。 山田	・コンピュータ操作については初めに説明をするとともに、机間指導も行う。	・文法支援ソフト ・コンピュータ	・主語・述語のねじれを見つめることができるか。(言)
		個別	・主語・述語のねじれを見つけるために、各自がコースを選択し、自力で発見する。 ヒントコース 左のコースを選択し、取り組む。 ヒントなしコース 自分で考えた理由をノートにまとめてみよう。 理由 ヒントコース 原因説明簡単コース まちがいの原因 「マンガは」という主語に「読んでいたよ」だとして、マンガは生き物ではないから「読んでいたよ」を述語にすると、主語は	・例文1より、自力解決が困難のように、自分の力に応じたコースが選択できるようにする。	・文法支援ソフト ・コンピュータ	・自分の課題に沿った学習に積極的に取り組もうとしているか。(関)
	・自分の課題に沿って、コース別学習をする。	グループ	・個別に見つけた主語・述語のねじれをグループで話し合い、正しい文に修正し、その理由をまとめる。	・ヒントカードを見ながら主語・述語・修飾語について確認しながら、解くように使う。	・文法ワークシート ・ヒントカード	・主語・述語のねじれの理由について、話し合い正しい文に修正できるか。(言)
		一斉	・例文1の主語・述語のねじれについて全体で発表し合い、確かめ合う。	・主語・述語のねじれの原因について基本文型に立ち戻り、根拠を明らかにして考えるようにする。		
	・自分の課題に沿って、コース別学習をする。	個別	・自分の課題に沿ってコース別学習で習熟練習を行う。 ・基本コース ・発展コース1 ・発展コース2 左のコースを選択し、取り組む。	・自分の習熟度を踏まえ、適切なコースを選ぶように助言する。 ・分からない問題については、コンピュータのヒントを参考にし、習熟によって次の段階を選び取り組むようにする。	・文法支援ソフト ・コンピュータ	・自分の課題に沿った学習に積極的に取り組もうとしているか。(関)
		個別	・文法支援ソフトの中の例文2を用いて、個別に主語・述語のねじれを見つける。 例文2 雨がとても強く、そして激しく吹いたので、まっすぐに歩けなかった。	・例文2は複文であるため、主語・述語を見つけ、基本文型を基に考えるようにする。	・文法支援ソフト ・コンピュータ	・主語・述語のねじれを見つめることができるか。(言)
	・例文2にある主語・述語のねじれを見つけ、正しい文につくりかえる。	グループ	・個別に見つけた主語・述語のねじれをグループで話し合い、正しい文に修正し、その理由をまとめる。	・文を省略せずに、何がどうしたのか分かる表現にするように支援する。	・文法ワークシート	・主語・述語のねじれの理由について、話し合い正しい文に修正できるか。(言)
		一斉	・例文2の主語・述語のねじれを指摘し、正しい文を全体で発表し、確かめ合う。			
	まとめ	・自己評価する。	個別	・今日の学習を振り返り、自己評価カードに記入する。	・基本文、複文、重文における主語・述語の関係が正しくとらえられたか考え、自己評価するよう助言する。	・自己評価カード
・次時の予定を知る。		一斉	・次時の学習内容を知る。			

※ (関) ……国語への関心・意欲・態度、(言) ……国語についての知識・理解・技能

(8) 展開1の評価

- ・ 主語・述語・修飾語の役割や働きについて、積極的に学習しようとしたか。
(国語への関心・意欲・態度)
- ・ 主語・述語・修飾語の役割や働きについて、自分の言葉で表現し、理解することができたか。
(言語についての知識・理解・技能)

展開2の評価

- ・ 主語・述語のねじれをとらえ、正確に表現するという課題について、積極的に学習しようとしたか。
(国語への関心・意欲・態度)
- ・ 主語・述語の基本を確認し、主語・述語のねじれに気付き、正しい文につくりかえることができたか。
(言語についての知識・理解・技能)

(9) 指導上の工夫

ア 課題解決に取り組む工夫(展開1)

- (課題1) 既習の文の成分(主語・述語・修飾語)について、その文の中の役割や働きを整理してつかむ。

この課題に取り組むに当たっては、既習の「文の成分」が文の中で大切な役割を担っていることに気付かせ、規則性を自分の言葉で表せるための課題解決の学習の手引きとしてコンピュータを活用します。

(ア) 気付きを促す工夫

気付きから課題意識をもった学習へ進むために生徒の生活実態に即した例文の中から、主語・述語・修飾語を省いた文を提示し、文の組立の基本となるものが省かれていると、文として整わないことに気付かせ、「文の成分」の規則性を考える課題への意識を高めるようにします。

その際、展開の初めで本時の大きな学習課題である「主語・述語・修飾語の役割は何か」を示すのではなく、主語・述語・修飾語を省いた文の「何が足りない?」という気付きをさせていくことは、生徒の思考の流れに無理なく、筋道立てた論理的思考に取り組ませるポイントになると考えます。その時、気付きをうまく整理できない生徒のために、ヒント画面として、文作りをする一人学習の手だてを用意しておくことも必要です。また、ヒント画面として活用しない生徒にとっても、欠けている部分の必要性を確認する手だてとします。このように主語・述語・修飾語が必要な成分であることを確認した後、「主語・述語・修飾語の役割、働きは何か」という課題を設定することが大切です。

(イ) 学習の手引きとしての工夫

この課題に取り組むに当たっては、事前に主語・述語・修飾語の習得状況を把握し、つまずきや実態に応じた学習支援ソフト(ヒント画面)を用意し、つまずきを予測し実態に即した支援をすることが必要です。単文における主語・述語の定着度に比べ、複文、重文になると形式的な暗記を要因とする課題があるという京都府小学校基礎学力診断テストの分析等を受け止め、役割や働きの面から考え、自分の言葉で整理し、表せるように促すことが大切です。また、「めんどろ」「考えられない」という理由で、学ぶ意欲をなくさせないようヒント

(画面1)

次の文は何か足りませんね。何が足りないのかな。

- ・ラーメンを 食べ
- ・たか子は、ワー
- ・サンタクロースは

(画面2)

次の文の中で、足

- ・ ラーメン

コースを設け、一人学習を基盤に自力解決を目指せる努力を促したいと考えます。

ヒントコースでは主語・述語・修飾語について、それぞれヒントの段階を考えて複数の例文を提示した画面の中で、その働きをつかませていくことが大切です。主語の場合は述語に当たる語に ~~~~ を引き、そこから考える視点を与えていくようにします。例文も「は」や「が」を含む単文から「も」「こそ」を含む単文、更に少しずつ文の構造を複雑にして複文、重文などを採り入れ、機械的な操作による主語見つけの活動にならないように考えます。さらに、主語の省略文と比較するなどして、主語の役割を考えさせます。こうした工夫によって、文の中心的役割となる働きを見つけだすことが可能になると考えます。述語や修飾語の場合も同じように役割が見いだせる手だての例文を用意します。コンピュータの指示だけで十分に行えない場合は、教師の机間指導による支援が必要です。

(画面3)

次の例文を参考にして、~~~~ の言葉

- ・山は とても 美しい。
- ・ぼくが 花を あげよう。
- ・犬も 歩けば 棒に あたる。
- ・私こそ、りっぱな 看護婦です。
- ・きのうは 寒くて、雪も 降った。
- ・彼女が 書いた 手紙が ある。

(ウ) 個人差への対応

こうした個に応じたヒントコースに取り組んでいく場合、一人一人の課題解決に要する時間に差異が生まれます。つまり自力解決に取り組む生徒への配慮が必要になります。このソフトの場合は、発展コースを用意し、より多くの複文や重文における主語、述語、修飾語の発見を提示し、主語の役割等をより一層定着させるようにします。

このようにコース学習によって一人一人が課題に取り組んだ後、集団で考えを交流し合うことによって、自分の考えを修正したり、補強したりして、考えを確認し合います。その時、役割や働きを一つの言葉でまとめてしまうのではなく、一人一人がつかんだ自分の言葉で表現していくことを大切にしたいと考えます。

イ 課題解決に取り組む工夫(展開2)

展開1で、主語・述語の役割や働きを把握し、確認した知識を基に、展開2では生徒が陥りやすい主語・述語のねじれのある文を正しい文に書き換える課題に取り組む道具としてコンピュータを活用します。主語なし、単語の羅列の文が多いという生徒の言語活動から考え、相手に分かりやすい表現活動の大切さを理解させたいというねらいがあります。

(課題2) 主語・述語の関係を正しくつかみ、主語・述語のねじれのない文を書く。

(ア) 気づきを促す工夫

まず、例文の主語・述語のねじれを個人で考える課題から取り組むようにします。文のねじれにすぐ気付く生徒もいれば、なかなか気付かない生徒もいるでしょう。そこで、ヒント画面を用意し、コース別学習へと展開します。ヒントなしコースを選択した生徒は、自分のノートに分かったことをまとめるようにします。この時大切なことは自分に適した選択をしているか。また、自分の意見を適切にまとめられているか等、教師がその都度、個々の生徒の学習状況を評価しながら支援することが大切です

(例文1)

山田君からの手紙

こんにちは、海野君。
海野君のマンガは、いつもおもしろ
読んでいたよ。

(ヒントコース)

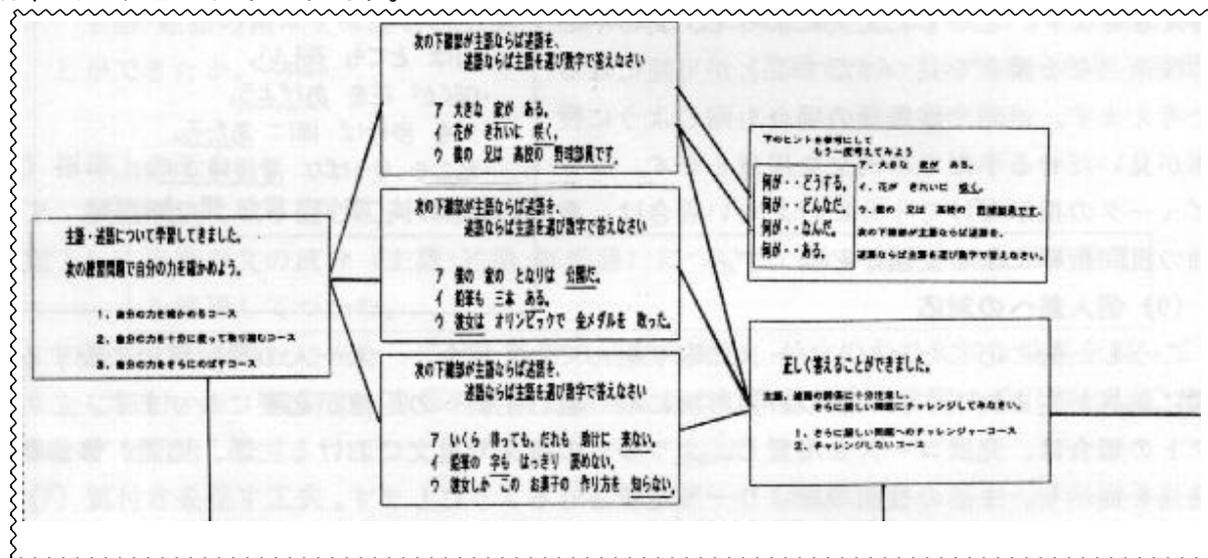
原因説明簡単コース

まちがいの原因

「マンガは」という主語に

(1) 個の習熟のための工夫

一斉授業の中で、例文1を学習した後、習熟練習を行います。ここでは、ドリル的な学習としてコンピュータを活用します。自分の習熟度の程度を自分で判断し、自分でコースを選択し、自分の課題に沿ったコースに取り組みます。そこで、生徒の実態に即し、いろいろな選択方法を可能にしてくれる自作のソフトウェアを活用します。このことは、意欲を喚起する上でも重要なことと考えます。コース別学習を行う場合にも、生徒の学習状況を教師側が把握することができるように、ソフトウェアを工夫して作成する必要があります。(資 1)は、そのフローチャートです。



資 1 フローチャート

(ウ) 学習の確認としての手だて

定着を図るためのコース別学習が終わった後、今までの学習内容を確認するために、次の課題例文2へ進みます。例文2は、主語が省略されている複文ですが基本を踏まえれば、例文1と同じように主語・述語のねじれを見つけ、正しい文に書き換えられるようにし、どんな複雑な文でも正確に主語・述語の把握ができるというねらいをもつ学習活動に取り組みさせます。

まず個別に、今までの学習内容を確認しながら考えさせるようにします。その際も、ヒントが必要な生徒に対応するために、ワンポイントのヒントが得られるようなコースを用意しておくことで、生徒の学習活動を支援することができます。

また、課題に対して、自分の判断で書くコースを選択したり、今までの学習を振り返るために、教科書やノートを見る方法を考えたり、様々な方法で自分の課題を解決する手だてを準備し、学び方を自分で考え、その中で主体的に学び方を身に付けるようにすることが大切です。

ウ コンピュータを活用した多様な学習形態の工夫

ア、イの項で述べたように、課題解決に当たっては、自力解決のための一人学習の手引きをソフトウェアの中に位置付け、直感から筋道立てて考えさせる手だてを用意し、一人学習

(例文2)

雨がとても強く、そして激しくまっすぐに歩けなかった。

話し合った結果はどうか
まちがいが見つけられたら
進もう。

雨がとても強く、そして
まっすぐに歩けなかった

の充実を図ります。しかし、学校におけるコンピュータ活用においては、個を生かしながら学習内容に応じて学習集団で考える場面等をどうつくるのかという個と集団の相互作用・相乗作用のある学習活動が大切になります。

例えば、展開1の一人学習の中で、主語・述語・修飾語を省いた文では、文として整わないことに気付き、その気付きをグループで話し合ったり、大きな課題である「主語・述語・修飾語のそれぞれの役割、働きは何か」の解決に際しても、支援画面から一人で考えたことを集団の中で練り合い、思考を深め、規則性を確認することが大切です。

また、展開2においては、主語・述語のねじれへの気付きや、主語・述語の正しい照応のある文に正す課題に取り組むに当たっては、一人学習を基本にしながら、気付いたことを発表したり、よりよい文章づくりを考えるなど集団思考によって、学習を高め合うことが必要です。

しかし、あくまで一人学習を基盤に自力解決を目指せる努力を図りたいと考えます。なぜなら一人学習を基盤にすることで、自分の考えをもち、話し合いを深めることができ、互いのよさを自分の学習の中に取り入れるという主体的な話し合い活動を成立させることができるからです。また、自分の考えや集団の意見などの発表に際しては、ワークシートに書き込み、整理するようになければなりません。いずれにしても、こうした学習を進めるためには、ソフトウェアの構成もドリル的に流れるのではなく、立ち止まりのできるものにする必要があります。

また、「個に応じた学習」を進める視点から考えると、課題解決の学習においても、習熟を深める学習においてもコンピュータを活用して、その時、その場で、自分の課題を認識したり、達成度を把握しながら自分で学習コースを選択することができるような工夫をしました。そこでは自己への振り返りや自己決定を日常的かつ自然に行うとともに、自己学習力の基礎を形成することができます。

展開2では、練習問題を「自分の力を確かめるコース」「自分の力を十分に使って取り組むコース」「自分の力をさらにのばすコース」として設定していますが、自分に合った課題に取り組み、段階に応じ達成感を味わわせ、次の段階へ挑もうとする意欲を高められるようコースの段階化にきめ細かい配慮や個人学習時間の確保をすることが大切です。



資 2 学習の様子

エ コンピュータ機能の活用における留意点

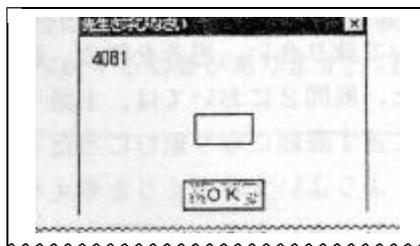
今回、コンピュータ活用に関しては、コンピュータソフトの機能に合わせた学習活動を展開するのではなく、学習内容から考えられる学習活動にコンピュータの機能を合致させる工夫を大切にし、F C A Iソフトで文法学習支援ソフトの作成に取り組みました。

中学校での文法学習の出発点である第1学年で、コンピュータを活用した授業を展開するためには、簡単な操作で学習を進められることが必要です。小学校段階での学習内容の習熟度には差があっても、コンピュータ操作に関しては同じレベルで行えることが大切です。そこで、リターンキーを押すだけで先へ進むことができる工夫をします。しかし、簡単な操作で先に進める機能だけでは、生徒独自の判断で、先へ先へと学習が進んでしまいます。課題解決学習において、生徒が立ち止まり考える時間やグループで深め合う時間を確保すること

で、学習活動の充実を図ることが大切です。また、教師が個人やグループの学習活動を評価して初めて、次の課題に進んでいくという学習展開が必要となります。そこで、教師が操作しないと生徒は次の課題に進むことができない機能を取り入れます。この機能は、生徒が次に進もうとしてリターンキーを押すと、自動的に画面に「先生を呼びなさい」と指示が現れ、教師が側へ行き、ある操作をしなければ次の画面へと進んでいけないというものです。(資 3)

このことによって教師が個人やグループの学習状況を的確に把握し、学習活動に対しての評価を行った上で次の課題に進んでいくといった展開を可能にしました。

また、F C A Iソフトの特徴は、独自でフレームを作成することで、生徒の実態や教師の意図に即したコース内容を展開できることです。コース別学習は、一人一人



資 3 コンピュータ画面

がコンピュータと会話することで、学習の個別化を図り、学習過程においてコースを選択し、生徒の能力、特性に応じて、効果的に学力を形成する学習を展開することができます。

そこで、一人一人の習熟度の違いや、学習速度の違いなど様々な違いに対応できるコース内容を作成しました。コース内容も、課題解決に役立つためのものと、反復練習のためのドリル的な学習用に作成しました。以上のように、学習過程を大切にし、コンピュータの機能を十分に活用することで、意欲を引き出すことができる工夫が必要であると考えます。

(10) まとめ

表現と理解に生きて働く言葉を豊かにすることによって、豊かな自己をはぐくむ基盤をつくるという視点に立ち、文法学習の在り方をもう一度考えてみました。課題解決学習を取り入れたコンピュータの活用による学習活動を通し、少しでも生徒の実態や教師の意図に即した授業を展開する工夫を探りました。実践授業では、生徒のコンピュータに対する興味が高いこともあり、生き生きと意欲的に学習に取り組む姿が見られ、「個」と「集団」の相互作用や高め合う相乗作用を生かした授業を展開することができました。

生徒の自己評価表の「コンピュータを使った学習の感想」には、

- ・友達といっしょにできるからすごく楽しかった。一人でやるよりも理解できてよかった。
- ・コンピュータを使って分かりやすかった。文中の誤りを探すのが難しかったけど、分かってよかった。自分で進めていかなければならないので、すごく考えさせられた。
- ・初めてだけど、けっこう分かったしよかった。それに、まちがっていても、解説がくわしく書いてあるので、とても分かりやすかった。また、コンピュータでしっかり復習したい。

などがあり、自力で解決しなければならない学習内容と、集団で深める学習内容を取り入れることで、生徒の課題解決に向けての主体的な学習活動が展開されたのではないかと考えます。

コンピュータを活用した授業を実践するに当たっては、今後も単元の特徴や教材の内容を吟味し、年間指導計画、単元指導計画の中でしっかりと位置付けし、実践することによって、生徒の学習意欲を向上させていくことが大切です。

言葉は、ものごとの認識、感情の形成、思考、意志の伝達等、人間が生きていく上において欠かすことができないものです。その言葉の基礎・基本の学習である文法学習に対する苦手意識を克服し、自分を生き生きと表現できる豊かな自己を育てることが大切です。そのため、楽しく主体的に学ぶことができる学習指導を追求していくことが、「生きる力」の基底をなす言葉をはぐくむ国語の学習に今、求められていると考えます。

また、自作支援ソフトを作成するに当たっては、生徒の実態把握を通して教材分析や学習目標の明確化や、作成時間の確保などを考えることが必要です。

展開 1

展開 2

(例文 1)

(ヒントコース)

(例文 2)

	一人学び	グループ学習	全員学習
第一時	主語・述語・修飾語を省いた文では、文として整わないことに気付き		